

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

1日

友引 奎

旧9月13日

土曜

妙法蓮華経陀羅尼品第二十六

じゅうらせつによ きしも じん だらにしゅ

十羅刹女と鬼子母神の陀羅尼呪①

「伊提履 伊提泯 伊提履 阿提履 伊提履」

十羅刹女と鬼子母神の十九の呪を紹介します。

①伊提履(いでび)・・・「是に於いて」と訳し、この人つまり凡夫のための教えということです。

②伊提泯(いでびん)・・・「斯に於いて」と訳し、この場所つまり娑婆世界の教えということです。

③伊提履(いでび)・・・①「伊提履」の繰り返しです。

④阿提履(あでび)・・・「民に於いて」と訳し、一切衆生のための教えということです。

⑤伊提履(いでび)・・・①③「伊提履」の繰り返しです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

2日

先負 婁

旧9月14日

日曜

妙法蓮華経陀羅尼品第二十六

十羅刹女と鬼子母神の陀羅尼呪②

「泥履 泥履 泥履 泥履 泥履 楼醯 楼醯 楼醯 楼醯」

⑥泥履(でび)：「無我」と訳し、自己に囚われることを捨てるということ。自己に囚われなければ周囲に影響されず自由になれるのです。

⑦泥履 ⑧泥履 ⑨泥履 ⑩泥履

大事なことなので繰り返されます。

⑪楼醯(ろけ)：「已興」と訳し、法華経を弘める機運は高まった、覚悟を決めよということです。

⑫楼醯 ⑬楼醯 ⑭楼醯

同じく大事なことなので繰り返されます。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳
2025年

11月

3日

文化の日

仏滅 胃

旧9月15日

月曜

妙法蓮華経陀羅尼品第二十六

十羅刹女と鬼子母神の陀羅尼呪③

「多醯 多醯 多醯 兜醯 菟醯」

⑮多醯(たけ)：「而立」と訳し、様々な困苦を経て教えが世に広まっていくことです。

⑯多醯 ⑰多醯

大事なことなので繰り返されます。

⑱兜醯(とけ)・⑲菟醯(とけ)：文字は異なっても同じ意味で「無加害」と訳し、法華経の行者のいかなる迫害も跳ね返す信心を指しています。

以上様々な神呪は法華経を弘める者の心持ちを説いており、行者の思いは守護されるのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

4日

大安 昴

旧9月16日

火曜

妙法蓮華経陀羅尼品第二十六

ご ばん じん しゅ

五番神呪

「五番善神の陀羅尼呪」

「五番神呪」とは五番善神の呪文のことです。

「五番善神」とは、「二聖(藥王菩薩・勇施菩薩)」、

「二天(毘沙門天・持国天)」、十女(十羅刹女)と鬼
子母神のことです。

法要にて「五番神呪」を読誦するときには、「妙法
蓮華経陀羅尼品第二十六」という品題と、五番善
神それぞれの陀羅尼呪、最後に『陀羅尼品』の最
後の句「得無生法忍」の順に読み、五番善神の御
守護を祈ります。

法華經 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

5日

赤口 畢

旧9月16日

水曜

妙法蓮華經陀羅尼品第二十六

ま くの お ほっ し

莫 悩 於 法 師

「法師を悩ますことなかれ」

法華經を弘める法師に対して、鬼や魔物が様々な迫害をしたり、何日も熱病に苦しめさせたりするなどの災禍に巻き込もうとしても、陀羅尼呪を唱えれば十羅刹女と鬼子母神が守護するとお釈迦さまに誓いを立てました。

しかし守護を得られるのは法華經を弘めようと努めている者に対してのことです。

陀羅尼呪を唱えさえすれば病気が治るというわけではないことを忘れてはいけません。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

6日

先勝 鶯

旧9月17日

木曜

妙法蓮華経陀羅尼品第二十六

ず は き しち ぶ
頭破作七分
如阿梨樹枝
によ あ り じゆ し

「法華経を迫害する罪の報いは大きい」

法華経を説く者を悩ますと、正しい教えが広まる
障害となるのでその罪は大きいのです。

その罪の報いとして、頭が七つに割れて阿梨樹と
いう木の枝が地に落ちて裂けたときのように惨
い状態になると説かれています。

正しい教えを受け入れることができないという
ことは、すでに頭が割れて正しい判断ができなく
なっているという喩えです。

行者迫害の罪の報いとして象徴的な表現です。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

7

日

立冬

友引 参

旧9月18日

金曜

妙法蓮華経陀羅尼品第二十六

によしぶもぎい

やくによおう ゆ おう

如殺父母罪

亦如压油殃

としよう ご おうにん

じようだつは そうざい

斗秤欺誑人

調達破僧罪

「法華経の行者迫害の罪」

法華経の行者迫害の罪が羅列されています。

「殺父母罪」は無間地獄に墮ちる罪です。

「压油殃」は菜種油を搾る際に強い圧を掛け過ぎると、虫がつぶれて死に、油も汚れてしまうことから、必要以上に力を行使し人に害を与えるしまうことをいいます。

「斗秤欺誑」は升(ます)や秤を不正に使うこと。

「調達」は提婆達多のこと、「調達破僧罪」は提婆達多が僧団を分裂させた罪です。

妙法蓮華經陀羅尼品第二十六

伊提履 伊提泯 伊提履 阿提履 伊提履 泥履 泥履 泥履 泥履 泥履

楼醯 楼醯 楼醯 楼醯 多醯 多醯 多醯 兜醯 𠂔醯

寧上我頭上。莫惱於法師。若夜叉。若羅刹。若餓鬼。若富單那。若吉蔗。若毘陀羅。若犍駄。若烏摩勒伽。若阿跋摩羅。若夜叉吉蔗。若人吉蔗。若熱病。若一日。若二日。若三日。若四日。乃至七日。若常熱病。若男形。若女形。若童男形。若童女形。乃至夢中。亦復莫惱。即於佛前。而說偈言

若不順我呪 惱乱說法者 頭破作七分 如阿梨樹枝

如殺父母罪 亦如压油殃 斗秤欺誑人 調達破僧罪

犯此法師者 当獲如是殃

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

8日

先負 井

旧9月19日

土曜

妙法蓮華経陀羅尼品第二十六

擁護受持法華名者

福不可量

「法華経を受持する者を守護する福德」

法華経が善い教えだと信じ、手を合わせて拝む者
を守護する福德がとても大きいと、お釈迦さまは
十羅刹女と鬼子母神に伝えました。

法華経の詳しい内容を知らなくても、花や香や音
楽等の供養をしなくても、手を合わせ拝む信者の
姿は周囲の人を感化し、大勢の利益につながるの
であると、お釈迦さまは喜ばれたのです。

法華経を受持する尊さと、信者の拝む姿が教えを
弘める大きな力になることを示しています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

9日

仏滅 鬼

旧9月20日

日曜

妙法蓮華経陀羅尼品第二十六

とく む しょう ぼう にん
得無生法忍

「世の中の変化に囚われず仏道に励み続ける」

「無生」は生死の縛りを離れること、「忍」は続くこと、「無生法忍」は生死を離れた心持ちを持ち続けること、「生死」とは、生きること死ぬことを含めた人生の変化すべてを指します。

「得無生法忍」とは、法華経に出会い人生の利害損得や世の中の変化に振り回されことなく仏道修行に励み続ける力を得たということ。

教えを弘めようとする者も、行者を守ろうとする者も「無生法忍」を得たのでした。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

10日

大安 柳

旧9月21日

月曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

みようしょうごん のうほん じほん

妙莊嚴王本事品

「妙莊嚴王の家族の信仰問題」

この章はバラモン教を信仰していた妙莊嚴王が
浄徳夫人と息子の浄蔵・浄眼に感化され仏教に
帰依するという物語です。

この章の前までは、仏の教えの奥深い真理ついで
言及してきましたが、本章では家族の信仰問
題が説かれていることに特徴があります。

世の中全体に教えを弘めることも大切ですが、
身近な家族に信仰を伝えていくことも同じくら
い大切なことです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

11日

赤口 星

旧9月22日

火曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

じょう

ぞう

浄蔵

じょう

げん

浄眼

「妙莊嚴王の二人の息子」

妙莊嚴王には浄蔵・浄眼という名の二人の息子がいました。

「浄蔵」とは心の中に清浄な気持ちがいっぱいあるという意味であり、「浄眼」とは一切の物事を清浄な眼をもって見るという意味です。

内に対しては煩惱がなく清浄で、外に対しては冷静に観察し理解するということです。

この二人は仏教を学び、福德と智慧を具え、多くの人を救う菩薩行を修めていました。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

12

日

先勝 張

旧9月23日

水曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

ほう べん は ら みつ

方便波羅蜜

「一切衆生を救うために方便を用いる」

浄蔵・浄眼の二人は、檀波羅蜜(布施)、尸羅波羅蜜(持戒)、羼提波羅蜜(忍辱)、毘梨耶波羅蜜(精進)、禪波羅蜜(禅定)、般若波羅蜜(智慧)の六波羅蜜に加えて、「方便波羅蜜」を修めたと説かれています。「方便波羅蜜」とは、一切衆生を救うために智慧をもつてさまざまな方便を用いることです。深い教えを理解できない相手にわかりやすいたとえ話を用いる際に、教えの本質を変えずに伝えるには智慧が発現されるからです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

13日

友引 翼

旧9月24日

木曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

慈悲喜捨

「四無量心」

慈悲喜捨とは「四無量心」のことです。

「四無量心」とは、

①慈心…人の幸福を思う心

②悲心…人の苦しみを取り除きたいと思う心

③喜心…人の幸福を共に喜ぶ心

④捨心…見返りを求めない心

この慈・悲・喜・捨の四つの心持ちは、あらゆる人々にその力が及ぶので、その功德は「無量」になるのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

14日

先負 伸

旧9月25日

金曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

さん じゅう しち ほん

三十七品

「悟りに至るための三十七の修行法」

「三十七品」とは三十七道品ともいい、悟りに至るための三十七の修行法のことです。

四念住(四つの観想)・四正断(四つの努力)・四神足(四つの自在力)・五根(五つの能力)・五力(五つの行動力)・七覚支(七つの悟りを構成するもの)・八正道(八つの正しい行ない)の七科に分かれ、徐々に段階を踏みながら悟りに至るための道筋が示されています。

凡夫は一足飛びに悟りには至れないものです。

妙法蓮華經陀羅尼品第二十六

諸羅刹女。說此偈已。白佛言。世尊。我等亦当身自擁護。受持誦誦。修行是經者。令得安穩。離諸衰患。消衆毒藥。佛告諸羅刹女。善哉善哉。汝等但能擁護受持法華名者。福不可量。何況擁護。具足受持。供養經卷。華香瓔珞。抹香塗香燒香。旛蓋伎樂。然種種燈。蘇燈油燈。諸香油燈。蘇摩那華油燈。瞻蔔華油燈。婆師迦華油燈。優鉢羅華油燈。如是等。百千種供養者。臯諦。汝等及眷屬。应当擁護。如是法師。說此陀羅尼品時。六万八千人。得無生法忍。

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七

爾時佛告諸大衆。乃往古世。過無量無辺。不可思議阿僧祇劫。有佛名雲雷音宿王華智。多陀阿伽度。阿羅訶。三藐三佛陀。国名光明莊嚴。劫名喜見。彼佛法中有王。名妙莊嚴。其王夫人。名曰淨徳。有二子。一名淨蔵。二名淨眼。是二子。有大神力。福德智慧。久修菩薩。所行之道。所謂檀波羅蜜。尸羅波羅蜜。羼提波羅蜜。毘梨耶波羅蜜。禪波羅蜜。般若波羅蜜。方便波羅蜜。慈悲喜捨。乃至三十七品助道法。皆悉明了通達。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

15日

仏滅 角

旧9月26日

土曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

じょうぞう

じょうげん

さんまい

浄蔵・浄眼の三昧

「浄蔵・浄眼が修めた三昧」

浄蔵・浄眼の兄弟はいくつもの三昧（心が一つに定まって動かないこと）を修めていました。

- ① 浄三昧：心の清浄を徹底的に求める三昧
- ② 日星宿三昧：日や星が周囲を照らす三昧
- ③ 浄光三昧：穢れない心で周囲を照らす三昧
- ④ 浄色三昧：清浄な心を姿や行動に表わす三昧
- ⑤ 浄照明三昧：周囲を明るく照らす三昧
- ⑥ 長莊嚴三昧：徳が具わり長じていく三昧
- ⑦ 大威徳蔵三昧：感化を及ぼす三昧

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

16日

大安 亢

旧9月27日

日曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

ひ ぶつ

よく いん どう みようしようごんのう

彼仏

欲引導妙莊嚴王

「仏さまは国王を導くことを願う」

雲雷音宿王華智仏は、妙莊嚴王を仏の教えに導きたいと願っていました。

人が集まり国が作られたら、秩序を保ち国を治める偉大な力を持つ王が必要です。

その王に高い徳と、理を見極める深い智慧があれば、国は栄え人々は安心を得られます。

逆に国王に徳が無ければ国は荒みます。

一切衆生を憐れむがゆえに、仏さまは国王を導きたいと願われるのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

17

日

赤口 氏

旧8月28日

月曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

願母往詣

雲雷音宿王華智仏所

がんも おうけい

うんらいおんしゆくおう けち ぶつしよ

「母を仏の説法に誘う」

淨蔵と淨眼の兄弟は、雲雷音宿王華智仏の説法を聴聞に行こうと母を誘いました。

そして兄弟は仏に仕え供養したいと伝えます。

母は兄弟の申し出を認め、さらに二人の父である妙莊嚴王を仏の教えに帰依させるようにと助言しました。

バラモン教に帰依している父王を導くように努力をしなければ、信仰を徹底したことにならず仏を供養することにならないと戒めたのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

18日

先勝 房

旧9月29日

火曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

げん しゅ じゅ じん ぺん

現種種神変

「さまざまな神通力を現わす」

母は二人の息子に、父王を感化させるためには
口で説くだけではなく、身をもって仏さまの教
えの素晴しさを伝えるようにと助言しました。

そこで兄弟は身体から火や水を出したり、空中
に座ったり歩くなどの神変(神通力)を父王に見
せたと経文にあります。

この神変とは超能力のようなものではなく、普
通の人ができそうもないことも正しい心の持ち
方で成し遂げられる喩えだと考えられます。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

19日

友引 心

旧9月30日

水曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

が こん やく よく
我今亦欲

けん によ どう し
見汝等師

「我、汝らの師を見たてまつらんと欲す」

妙莊嚴王は淨蔵・淨眼の神変を見て、喜び、二人の師に会いたいと望みました。

自分の息子でありながら、自分を超える立派な行動をできるようになったことに感動し、その教えを授けてくれた師に会いたいと思うほどの刺激を受けたのでしよう。

子が親を諭すのはいつの世も難しいことです。それほどに兄弟の「神変」正しい教えに基づく行動」が父の心を動かしたのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

20日

仏滅 心

旧10月1日

木曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

已い作さ仏ぶつ事じ

「すでに仏事を作す」

妙莊嚴王を導いた淨蔵・淨眼の兄弟は、「仏事を作した」と母に伝えました。

「仏事を作す」とは、仏さまの御心と一致するよう
な行ないをすること、一切衆生を救い導くために
尽くすことです。

父王を正しい信仰に目覚めさせたということとは、
国民全体を幸福に導き救うという大きな仏事を
作したことになります。

そして、兄弟は仏の境界に一步近づいたのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

21日

大安 尾

旧10月2日

金曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

ち ぶつ ぶ なん ぜ

値仏復難是

「仏に値いたてまつることは難しい」

淨蔵・淨眼の兄弟は、母に出家して雲雷音宿王華智仏のもとで修行したいと申し出ました。

仏さまに値い、その教えを聴くことができる機会に出会うのは、三千年に一度咲く優曇華（うどんげ）という花を見るよりもさらに難しいことです。

迷っているうちに機を逸したら、二度とその機会がないということはよくあることです。

本物に出会ったその時を見極めて、飛びこむことができるか否かで、人生が変わるのです。

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七

又得菩薩淨三昧。日星宿三昧。淨光三昧。淨色三昧。淨照明三昧。長莊嚴三昧。大威德藏三昧。於此三昧。亦悉通達。

爾時彼佛。欲引導。妙莊嚴王。及愍念衆生故。說是法華經。時淨藏淨眼二子。到其母所。合十指爪掌白言。願母往詣。

雲雷音宿王華智佛所。我等亦當。侍從親近。供養禮拜。所以者何。此佛於一切。天人衆中。說法華經。宜心聽受。母告

子言。汝父信受外道。深著婆羅門法。汝等應往白父。與共俱去。淨藏淨眼。合十指爪掌白母。我等是法王子。而生此邪

見家。母告子言。汝等當憂念汝父。為現神變。若得見者。心必清淨。或聽我等。往至佛所。於是二子。念其父故。踊在

虛空。高七多羅樹。現種種神變。於虛空中。行住坐臥。身上出水。身下出火。身上出火。或現大身。滿虛空

中。而復現小。小復現大。於空中滅。忽然在地。入地如水。履水如地。現如是等。種種神變。令其父王。心淨信解。時

父見子。神力如是。心大歡喜。得未曾有。合掌向子言。汝等師為是誰。誰之弟子。二子白言。大王。彼雲雷音宿王華智

佛。今在七寶菩提樹下。法座上坐。於一切世間。天人衆中。広說法華經。是我等師。我是弟子。父語子言。我今亦欲。

見汝等師。可共俱往。於是二子。從空中下。到其母所。合掌白母。父王今已信解。堪任發阿耨多羅三藐三菩提心。我等

為父。已作佛事。願母見聽。於彼佛所。出家修道。爾時二子。欲重宣其意。以偈白母

願母放我等 出家作沙門 諸佛甚難值 我等隨佛學 如優曇波羅 值佛復難是 脫諸難亦難 願聽我出家

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

22日

小雪

赤口 箕

旧10月3日

土曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

いち げん し き

一眼之亀

「苦海を漂う一眼の亀」

広大な大海原を泳いでいる片目の亀が、海を漂う流木の小さな穴に出会うように、仏さまに値うことは極めて稀であることの喩えです。

大海は生死の苦海、一眼の亀は私たち衆生、流木の穴は仏さまの真実の教えです。

片目が見えないような状態で悩み苦しみ迷いの海を漂っているときに、仏さまの救いの光を見つけるのは容易なことではありません。

教えに出会ったこの時を大切にしましょう。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

23日

先勝 斗

旧10月4日

日曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

ぜん け ご ふ

善化其父

「その父を教化する」

浄眼は「法華三昧（法華経を体得し実行していく
覚悟）」を、浄蔵は「離諸悪趣三昧（煩惱を滅し清浄
な心を維持する覚悟）」を修め菩薩となりました。
母の浄徳夫人は「諸仏集三昧（仏さまのことを深
く考えて理解する覚悟）」を修めました。

そして、妙莊嚴王は二人の息子と夫人に感化さ
れ、バラモン教を離れ仏教に帰依するのです。
仏さまの教えが本物であったからこそ、家族の
姿に教化されたのでしょう。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

24日

友引 女

旧10月5日

月曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

おう

だい

かん

えつ

王大歡悦

「妙莊嚴王は大いに歡悦した」

雲雷音宿王華仏の説法を聴いた妙莊嚴王は、大いに感激し、その感謝の気持ちを表すために高価な首飾りを捧げました。

その首飾りは立派な台や敷物となり、仏が坐する場所を莊嚴しました。

仏恩に報いる感謝の大きさを示す喩えです。

仏さまの恩に報いる一番の方法は、世間の迷っているたくさんの人を救うことです。

それが仏さまが一番喜ばれることです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

25日

先勝 虚

旧10月6日

火曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

じょ ぶつ どう ほう

とう とく さ ぶつ

助仏道法 当得作仏

「妙莊嚴王は仏の道を進み、仏に成るだろう」

妙莊嚴王が仏恩に報いるために供養したことに
応えて、雲雷音宿王華仏は妙莊嚴王が仏に成る
ことができるかと授記を与えます。

妙莊嚴王の帰依する心が強かったからこそ、仏
さまは即座に応えてくれたのです。

そして多くの人々を導く地位にある国王に授記
を与えたことにも大きな意味があります。

国を率いる王が仏教に帰依して、仏の教えを弘
める功德が及ぶところは大きいのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

26日

仏滅 危

旧10月7日

木曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

ごう しゃ ら じゅ おう

号沙羅樹王

「その名を沙羅樹王という」

二本並んだ「沙羅樹」の下でお釈迦さまが入滅したことから般涅槃の象徴とされ、『平家物語』の冒頭にも登場するのは「沙羅双樹」です。

「沙羅樹」はどの方向から見ても美しい樹だといわれています。

日のさす方向とは関係なく枝を広げるその姿は、どこから見られても欠点がない徳を具えていることに喩えられているのです。

妙莊嚴王の仏としての名です。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

27

日

大安 室

旧10月8日

金曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

しゅつ け しゅ どう

出家修道

「妙莊嚴王は出家し修行をした」

仏に成る人は出家して修行します。

「出家」とは家を捨て去って仏道修行に専心する身となることです。世俗を離れ山中に暮らす「遁世」とは異なります。

「出世間（迷いの苦界から出た清らかな世界）」という仏のさとりの世界や境地に入る「出世」が、出家の目的なのです。

まずは、日常の迷いを放置せず、妥協せずに真実を求める決心することが出家の始まりです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

28日

赤口 壁

旧10月9日

金曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

じょう ごん しょう じん

常勤精進

「常に勤めて精進す」

凡夫は急ぎの仕事ではないと分かると、つい怠けてしまったり、後回しにしているうちに忘れてしまったりするものです。

また、いざ締切が近づくと時間が足りないとり乱すこともあります。

慌てず、焦らず、怠らず、一步一步堅実に歩むことが「常勤精進」です。

仏道修行は終わりのない長い道のりです。

弛むことなく歩みを進めましょう。

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七

所以者何。佛難得值。如優曇波羅華。又如一眼之龜。值浮木孔。而我等宿福深厚。

〈略〉

以方便力。善化其父。令心信解。好樂佛法。於是妙莊嚴王。与群臣眷属俱。淨徳夫

〈略〉

爾時彼佛。為王說法。示教利喜。王大歡悦。爾時妙莊嚴王。及其夫人。解頸真珠璣

〈略〉

妙莊嚴王。於我前合掌立不。此王於我法中。作比丘。精勤修習。助佛道法。当得作佛。号娑羅樹王。国名大光。劫名大高王。其娑羅樹王佛。有無量菩薩衆。及無量声聞。其国平正。功德如是。其王即時。以国付弟。王与夫人二子。并諸眷属。於佛法中。出家修道。王出家已。於八万四千歳。常勤精進。修行妙法華經。過是已後。得一切淨功德莊嚴三昧。即昇虚空。高七多羅樹。而白佛言。世尊。此我二子。已作佛事。以神通变化。転我邪心。令得安住。於佛法中。得見世尊。此二子者。是我善知

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

29日

先勝 奎

旧10月10日

土曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

いつさい じょうくどく しょうごん さんまい

一切淨功德莊嚴三昧

「見返りを求めず功德を積む三昧」

世の中の人々を救うことを悦びとして、人に認められることを望んだり、見返りを求めたりしないことが「淨功德」です。

人知れず「淨功德」を積んでいくと、真の自分の心を飾るもの、「莊嚴」となるのです。

「淨功德莊嚴」という心が定まって動かないのが「淨功德莊嚴三昧」です。

「淨功德莊嚴三昧」を得た沙羅樹王仏（妙莊嚴王）の仏国土は平和な国であったことでしょう。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

11月

30日

友引 婁

旧10月11日

日曜

妙法蓮華経妙莊嚴王本事品第二十七

しにししゃ ぜがぜんちしき

此二子者 是我善智識

「二人の息子は善智識である」

妙莊嚴王は修行を積み、「一切淨功德莊嚴三昧」を得ることができたのは、二人の息子が多くの人を救い続け、自分も導いてくれた御蔭であり、二人を「善智識」であると述べています。そして、仏に帰依する心持ちにしてくれた二人の息子への恩の大きさを説いています。息子たちは自分に善い行いをさせようと、前世から深い縁をもって自分の家に生まれて来てくれたのだと心から感謝をしています。

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七

得一切淨功德莊嚴三昧。即昇虛空。高七多羅樹。而白佛言。世尊。此我二子。已作佛事。以神通變化。轉我邪心。令得安住。於佛法中。得見世尊。

此二子者。是我善知識。為欲發起。宿世善根。饒益我故。來生我家。

爾時雲雷音宿王華智佛。告妙莊嚴王言。如是如是。如汝所言。若善男子。善女人。種善根故。世世得善知識。其善知識。能作佛事。示教利喜。令入阿耨多羅三藐三菩提。大王。當知。善知識者。是大因緣。所謂化導。令得見佛。發阿耨多羅三藐三菩提心。大王汝見。此二子不。此二子。已曾供養。六十五百千万億。那由他。恒河沙諸佛。親近恭敬。於諸佛所。受持法華經。愍念邪見衆生。令住正見。妙莊嚴王。即從虛空中下。而白佛言。世尊。如來甚希有。以功德智慧故。頂上肉髻。光明顯照。其眼長広。而紺青色。眉間毫相。白如珂月。齒白齊密。常有光明。唇色赤好。如頻婆果。爾時妙莊嚴王。讚歎